

京都大学地理学談話会

会 報

第23号



2012

[目 次]

寄稿

留学のこと.....	小島 泰雄 (1985年卒)	1
アカデミズム地理学との出会い.....	Rosalia Avila Tàpies (1994年修)	2
教員として育つために.....	岡本 憲幸 (2006年卒)	5

秋季地理学談話会の報告

〈OB交流会〉 講師：岩田 憲司 (1996年卒), 勝部泰行 (2007年卒)	8
〈講演会〉 「黄河之水」に誘われて—カルチャーショック遍歴—	端 信行 (1966年卒) 9

研究室便り

〈総合博物館における地図資料等の利用について〉	12
〈外国人研究者～訪問された方～〉	12
〈地理学教室への寄贈図書～2011年度～〉	12
〈研究室の動静〉	17
〈3回生, 修士1回生の自己紹介〉	
〈2011年度の実習旅行〉	
〈学部卒業生・院生の進路〉	
〈院生の研究状況の報告〉	
〈2012年度講義題目〉	

事務局から

〈地理学談話会2011年度会計報告〉	19
〈訃報〉	20
〈住所不明者についてお願い〉	20
〈オープンキャンパス：2011年度の報告と2012年度のお知らせ〉	21
〈2012年度秋季地理学談話会のお知らせ〉	22
〈地理学教室所蔵の写真資料について〉	22

寄稿

留学のこと

京都大学大学院人間・環境学研究科

小島 泰雄(1985年卒)

いつ研究者になろうと思ったのですか、と学生からよく尋ねられます。それは、小さい頃から、コックさん、サッカー選手などと同列に並べられた選択肢の一つだったかもしれません。ただ、大学院に進むことを決めたときでも、アカデミーで食べてゆく見通しがあったわけではありません。地理学の研究者になることよりも地理学そのものに興味があった、と言えば、ちょっと格好良すぎるかもしれません。院生や教員が、時に楽しそうに、あるいは呻吟しながら取り組んでいる研究について、彼らの後に続いてみることで何が面白いのかわかるだろう、と期待したというのが、当時の気持ちを素直に表しているように思います。

知らないということは、気楽なことです。卒論を書くために論文を読み進めてゆくうちに、この程度の内容ならすぐに書けそうだと思える論文に出会うと、その論文が著者の研究全体においていかなる位置にあるかを無視して、研究者になるということはそれほど難しいことではないらしい、と不遜にも思うことができました。

ところが大学院に入って、それこそブ

ロになることを意識して研究に取り組み始めると、その難しさが見えてきます。

1本の論文を書き上げるというしんどい行為も、既存の知の体系にとっては、わずかな貢献をなしうるだけであることを知り、そもそも研究に優劣はつけがたく、よい研究者になる定められた道の無いことに気づきました。

1980年代半ばの大学院生は、総数では今の三分の一程しかいませんので、研究職に就くための競争は、地理学教室の院生の間では第一義的な関心事ではありませんでした。むしろ研究者としてやってゆくために必要なことは何であるかを考えることのほうが、多かったように思います。そして、次第にそれが自らの研究する力量についての信頼であると思うようになりました。研究する自信、こう短く言い換えてみると、それがなければまともな論文は書けないことや、万全な自信も過信でしかないことは、明らかでしょう。

一人ひとりの研究者が個々の研究を進めてゆく中で、徐々に形成されてゆくのが「研究する自信」ではないでしょうか。振り返ってみても、それがいつ身についたのかはわかりませんし、残念ながらいまでも不安定であり、新しい領域にチャレンジする時には、それが頼りないものに見えることもあります。それでもこの四半世紀につんだ経験が私の研究する自信を支えているのだと思えます。よき師の薫陶を受けたこと、大学院のきびしい演習で院生の面々に鍛えられたこと、手

当たり次第に論文を読んだこと、農家を訪ねて多くの農民の話を聞いたこと、学際的なフィールド調査で多分野の研究者と議論したこと、そうした一つひとつが、いまの研究を支えています。そして、他の研究者と違うことをする、ということも研究する自信の形成には大切なことではないでしょうか。その点で、私にとって留学は貴重な経験でした。

私は博士後期課程 2 年の夏から 2 年間、中国の南京大学の地理学部（大地海洋科学系）に留学しました。中国語は第二外国語で学んでいたものの、それは論文を読むことができる程度のもので、話すことと聞くことは留学してから習得することになりました。留学生向けの語学授業はまだしも、専門の講義や演習は十分に話を聞き取ることが出来ず、最後まで苦勞しました。また中国政府の奨学金による高級進修生という研究者待遇での留学だったので、自ら計画してフィールド調査を行うこともできましたが、それも若い教員や大学院生のサポートがなければ、ノートを取ることもばかりか、農民と意志を疎通させることさえ困難でした。留学から 10 年ほどたって、指導教官だった崔功豪先生から、中国語が上達したね、と言われたことがあります。先生にほめられるのはうれしいことですが、同時に、留学中の中国語力が未熟だったことを指摘されたようで、すこし恥じ入りました。留学はすべてを解決してくれるものではなく、新しい挑戦の入り口を与えてくれるものなのです。

留学の 1 年目が終わろうとした時に、天安門事件（1989 年）が発生しました。いまから振り返ると、あの頃の中国は、社会主義と市場経済が共存するための産みの苦しみの最中にあったと言えるでしょう。南京大学で民主化運動に取り組んでいた学生たちは、むき出しの権力に直面して、深い挫折を味わうことになりました。鄧小平を象徴する小瓶が窓から投げ捨てられて砕け散る音が、耳に残っています。歴史が動く瞬間に立ち会ったことは、中国という地域をそこに暮らす人びとの文脈で理解する大切さに目を開かせてくれました。地域そのものに取り組む地理学研究者が減る中で、敢えて地域地理学にこだわって研究を続けてゆけることも、留学が私に与えてくれた挑戦の機会だと感謝しています。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

アカデミズム地理学との出会い

Rosalia Avila Tàpies（1994年修）

地理学教室で流行している研究テーマやデータの分析方法などに関心を持っていますので、今年も 2 月の京大の談話会に出席しました。大都市圏郊外を研究対象にした修士論文の発表があったのですが、私も近い研究をしていたので、発表を聞きながら懐かしく学生時代を思い出しました。

私と地理学との初めての出会いは1985年です。古代史を勉強するためにバルセロナ大学の地理・歴史学部に入りました。当時、スペインはベビーブーム世代の子が大学に入学する時期で、また高等教育に対する社会評価の上昇も相まって、地理・歴史学部も学生の人数（社会人も含む）が多く、1回生は朝・昼・夕・晩の4つのグループに分けられ、さらに各時間帯で3つぐらいのグループに分けられました。

当時の大学は5年制で、バルセロナ大学の地理・歴史学部では各学年に5つの通年科目があり、各科目は週3コマでした。実用的なクラスやゼミナール、卒論はなく、講義および学期中と学期末の試験だけで進められました。第1期は3年間で15科目、第2期は2年間で10科目、第3期（博士課程）は最低2年間で32単位を取得し、2年次から専攻に分かれ、4年次から副専攻に分かれていくシステムでした。カリキュラムはある程度固定されており、特に1回生は全新入生が決まった5科目を履修するようになっていました。ただし、2年次から先史学・古代史または中世史を専攻にする予定の1回生は、例外的に必修の「社会科学の方法論」の代わりに「ラテン語」を履修することになっていました。

古代史を勉強するため入学した私は当然ラテン語を受講し、『ガリア戦記』の翻訳に熱中していました。しかし、1回生で受講したマリン先生の「地理学入門」の授業に深く感動したのがきっかけで、

2回生で地理学を専攻にすることにしたのです（もちろん「社会科学の方法論」は2回生で履修させられました）。私の運命を変えた科目でした。この時、もうユリウス・カエサルのガリア征服の勉強は何も役に立たないのだ、とっていました。でもそれは間違いでした。10数年後に地球の裏側の甲南大学の准教授となり、担当した「ヨーロッパ地域研究」のゼミで、その勉強が生かされることになりました。

マリン先生の授業はたいへん奥深く、地理学思想史が中心で、それまでに聞いたことがない話ばかりでした。19世紀におけるアカデミズムとしての地理学の確立を境として、それ以前とそれ以降の地理学について教わりました。授業の大枠は、①前近代の地理学の思想（古代、ルネッサンス期、啓蒙時代およびロマン主義の地理学）、②近代の地理学の多様な流れ、環境論（地政学、アナーキズムの思想、環境決定論）や科学的地理学と地理学界の誕生、地理学と民族主義、植民地主義との関係など、③歴史主義と地誌学の視点、④現代の地理学の動向（計量地理学の登場とその論理的な革命、政治的コミットメントのある地理学、人文主義の地理学）、⑤スペインとカタルーニャの地理学界、という内容でした。

1986年9月、2回生となり、すぐに地理学科を専攻しようとしたのですが、驚いたことに地理学科がなくなっていました。当時、バルセロナ大学は地理学に大きな力を入れており、代わりに人文地理

学と自然地理学・地域分析地理学という二つの学科が創設されたのです。

バルセロナ大学の地理学の特徴は、フランス学派(1920-50)の強い影響を受け、歴史的発展過程、ミクروسケールの研究、経験論的帰納主義が重視されていることです。その理由は、外国語の中でフランス語がよく利用される言葉であったことに加え、18世紀以降、フランス文化の影響が大きかったためで、当時スペインを代表する地理学者はフランスでの留学経験があり、両国の研究交流も頻繁に行われていたことによります。フランスと国境を接するカタルーニャでは伝統的にフランス学派地誌学の影響が強く、フランス学派による地理学の概念と地誌学の方法論が長い間支配的でした。スペイン語、カタルーニャ語とフランス語とは言語体系が近いこともあり、早くからバルセロナ大学は現代の地理学の流れと研究方法の「入口」となりました。バルセロナ大学の地理学科は独自の地理学を展開していないと言われますが、外国から孤立していないということも言えます。

ある日、人文地理学科の掲示板を見ていた時、大学生募集の掲示に注意を引かれました。ワルシャワ大学とバルセロナ大学の地理学生の第一回交換留学計画による募集でした。2回生になったばかりなので入れてもらえるかしら？と思いながら、その担当教員であったカレラス先生に連絡し、一年間の留学準備活動が始まりました。10人のグループが結成され、国際チームで留学経験のある先輩の指導

の下で、正式に協会（INTERGEO）に登録し、諸政府機関や財団、銀行、大学などを対象とする広い募金活動をはじめました。同時にポーランド・カタルーニャにおける2か月のフィールドワークの内容も決まりました。

ちょうどその時、思いがけないことが起きました。スペインの大学全体の大規模なストライキでした。大学改正法の反対運動で3か月間休講となり、交換留学を実現するためのたくさん時間が取れるようになりました。その夏、共産主義下のポーランドとカタルーニャの田舎で、ポーランドの地理学生と共に生まれて初めてフィールドワークができました。ストライキのせいで（おかげで？）「人文地理学」などの必修科目は短くなり、充実した国際交流が可能になったのです。たぶんそれが遠因で、大学で「人文地理学」を教えることは気が進まず、甲南大学の准教授時代は「地誌」と交換してもらい、「人文地理学」は久武先生に担当頂いておりました。

第2期に進級し、「地理学全般」の副専攻を選択し、自然地理学、人文地理学と地誌学から基本的な科目をとることになりました。その中に将来役立つことになる科目もありました。プジャダス先生の「社会地理学」の講義は、人口動態的な内容で、レポートの課題は「スペインの都市の人口学的研究」でした。南部スペインのコルドバ市を選び、スペイン統計局の「人口静態統計」と「人口動態統計」からコルドバ市のデータを得て、基礎的

な研究方法によってコルドバ市の人口推移や自然動態，社会動態など細かい計量的な地域人口分析を行いました。来日後，応地先生と石川先生の指導の下でスペイン全体の人口動態と人口の移動流の空間パターンに焦点を当て，その分析結果を論文としてまとめることができました。

来日してから20数年になりましたが，西洋と東洋の思想や伝統の影響を受け，広い視点を持って地理学ができるようになったと思います。私の研究も発展し，計量的な人口地理学の研究から，移住・



甲南大学のAvilaゼミ(2008年)



Avilaゼミによる京都巡検(2008年)

移民現象，エスニシティ，女性・ジェンダー研究などに広がることになり，それにともない定性的な研究の導入にも力を注いできました。研究する動機は，自分の知的好奇心や，問題の重要性，論文投稿の依頼などいろいろです。特に最近の通信技術の進歩は私の研究にも良い影響を与え，国際的な共同研究チームへの参加も可能になり，また母国スペインの通信大学で講義を担当できるようになりました。

今，振り返って言えることは，“役に立たなかった勉強は一つ也没有せん”ということです。そして，失敗を恐れないこと。困難こそがチャンスなのです。また，最近に特に強く感じているのは交流と共同研究の重要性です。そのとき大切なことは，何をするにしても自分自身のスタイル，軸を見つける必要があります。“whatever you do you have to find your own style”. 成功に大事なものは，規律，フォーカス，情熱，それに，自信を持つことです。頑張ってください。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

教員として育つために

東海中学・高等学校
岡本 憲幸(2006年卒)

教職に関する文章を談話会報に書きませんかと打診された時，正直驚きました。

もっと他に適した人がみえるのにも思いましたが、今までを振り返るいい機会だと思い、引き受けさせていただきました。

私は学部・修士・聴講生と5年間研究室に在籍していました。現在は、愛知県の私立東海中学・高等学校に勤務しています。東海は中高一貫の男子校で、そして私の母校です。詳しくは「<http://www.tokai-jh.ed.jp/>」をご覧ください。教科は主に地理を担当していますが、今年度は中学3年生の担任のため、公民も担当しています。

私が教員を目指したのは、両親が教員だったこともあり、小学校の頃から教員になろうと漠然と考えていました。そのため、大学に入学すると同時に、教職免許を取るべく単位をとりました。1、2回生の時は、一般教養や文学部共通科目とも社会科の教科に関する単位を優先的にとりました。早くに教科に関する単位をそろえておくと、後の負担が少なくなり、かつ卒業単位も得る事ができます。2回生からは、教育学部で教職に関する講義も開講されるので、自分が受講したい講義以外は教職に関する講義を受けました。

●教科・教職に関する単位は早めに取得する。

●受講すべき講義の優先順位を決める。

教職に関する講義の中には、隔年のものや半期しか開講されないものもあり、年度当初によく検討して登録するといいです。

できる限りスタートは早いほうがいいで

すが、3回生から単位をそろえ始めても大丈夫です。

単位がそろくと、次は実習です。現在の教職免許は「教育実習」だけでなく、中学の免許をとる人は「介護等体験(盲聾養学校で2日+社会福祉施設で5日)」を行う必要があります。4回生で教育実習を行うと思いますが、手続きなど動き始めるのは3回生からです。介護等体験も手続きは早い時期から行う必要があります。

●実習の手続き・申し込みは早いので、常に申し込み期日に関する情報は掲示板を見て入手する。

教育実習は受け入れ校の都合もあるので、大学での手続きだけでなく、受け入れ校への連絡・確認も早く行う必要があります。

教育実習で授業をしてみると、計画通りには進みません。しかし、生徒の反応から内容がちゃんと伝わっているのかが分かりますし、説明が不足しているところや余分なところもよくわかってきます。自分で「分かっている」というレベルと、人に「教えられる」というレベルの違いを、教育実習は気付かせてくれました。就職してから言われたのは、「中学生に教えるのなら、小学生に分かるような説明をする」ということです。自分が「分かっている」ことを噛みくだいて、相手が「分かる」レベルに編集する力が必要となります。

教壇に立つ機会はあまりないと思いますので、人前で話す機会を大切にしまし

よう。例えば、研究室でのゼミ発表において、内容を整理し、他の人が理解しやすいようなプレゼンテーションをするように心がけてみると、人に伝える力が身につくと思います。

●人前で話す機会を大切に。その際、相手に内容が伝わるような工夫を。

学部卒業後、修士課程と聴講生の2年間、非常勤講師を2校で務めさせていただきました。この経験は教壇に立つ機会を与えていただけただけでなく、他の先生の実践に触れることができたという点で、非常に大きかったです。

採用試験ですが、私は一貫校の私学を志望しました。一つは母校が一貫校で、6年間で生徒を育てるという点に魅力を感じたこと、もう一つは私学の方が様々な取り組みができるのではないかと考えたからです。私学の場合、「私学関係公募」や「日本私学教育研究所」といった公募サイトや、各都道府県の私学協会、各校のホームページに採用情報があります。こまめにチェックするといいでしょう。試験は各校によって違い、学力試験やレポート試験、さらには模擬授業があるところもあります。採用試験の情報をよく見て、しっかり対応しましょう。

●採用情報は隈なく探すこと。公立・私立ともに得られる情報は得ておくこと。

●採用試験の種類はさまざま。どんな試験内容かはしっかり調べて対応すること。

教員になって、教科でも部活でも目の前にいる生徒を少しでも成長させたいという思いで働いています。教科に関して

は、どの分野をやるにしても地理の専門性を大切にしたいほうがいいです。生徒の様子を見ながら授業するのは難しいですが、必死に教材研究をして授業に臨むと、そのうち生徒の様子もつかめるようになりますし、生徒のほうも教員の真剣さを理解してくれると思います。

生徒指導は教科指導以上に難しいと思います。就職してすぐだと「大学生」のままであって、すぐに「先生」になれるわけではありません。いろんな経験や困難な問題を経て初めて「先生」になっていけると思います。最初は失敗や反省ばかりですが、そこで生徒指導の手を抜くようなことはしないほうがいいでしょう。なぜなら、生徒はその態度をすぐに見抜きます。

●何事も全力で取り組む。手を抜けばその態度を生徒が見透かす。全力で取り組んでいれば、生徒は見えていないように見ている(と信じる)。

現在、教員になりたいと強く希望する人が増えたように思います。それだけ教育に対しての思いがあるので頼もしいことです。しかし、思いが強くあるほど、現状とのギャップに悩んでしまうこともあります。もし教員になったら、あまり肩肘張らなくていいですし、理想的な「先生」を目指そうとしなくてもいいと思います。生徒とともに自分も成長していけばいいと考えています。また、どんなタイプの教員がいてもいいと思います。いろんなタイプの教員が集まっているほうが、生徒たちにとってもいい刺激になり

ます。もし悩みを抱えたときは、他の教員に話をして悩みを共有（分散!?）しましょう。

●どんなタイプの先生でもいい。肩肘張らずに生徒に向き合っていれば。

まとまりのない文章は研究室時代から変わりませんが、教職を目指す学部生・院生に少しでも参考になれば幸いです。

→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

秋季地理学談話会の報告

2011 年 10 月 29 日、文学部新館第 1・2 講義室において、秋季地理学談話会を開催し、大勢の卒業生や在学生の皆様にご参加いただきました。ご講演いただいた端 信行氏（1966 年卒）はじめ、OB 交流会で講師をしてくださった卒業生の方々に厚く御礼申し上げます。談話会に先立って、教室見学会も企画されました。

以下、OB 交流会と講演会についてご報告します。

<OB 交流会>

卒業生の岩田憲司氏（伊藤忠商事、1996 年卒）と勝部泰行氏（住友商事、2007 年卒）のお二人が講師を務めてくださいました。在学当時の思い出や社会に出るまでの体験、社会に出てからの歩みなど、

さまざまなエピソードを交えながら、アドバイスだけでなく温かい励ましの言葉もいただきました。活発な質疑や意見交換があり、楽しい交流の機会となりましたし、岩田さんの同級生の方々（地理学教室の卒業生を含む）のご参加もありました。同日夜にはミニ同窓会（学年会）も開かれたとのこと。談話会が集まりのきっかけとなったのでしたら、なによりです。

講師の方々と司会者（網島 聖氏（D3）と神戸陽菜子氏（4 回生）との間で打ち合わせして、進行内容も企画していただきました。ありがとうございました。



OB交流会



懇親会

<講演会>

「黄河之水」に誘われて

—カルチャーショック遍歴—

端 信行(1966年卒)

はじめに

わたしがこの談話会の脱藩者のような研究生活をするようになった理由は、ひとことで言うと、“カルチャーショック遍歴”とでもいうような、若い頃からいくつかの決定的な“カルチャーショック”に直面して、それらのリハビリにかなりのエネルギーを注いできたからと思っています。

タイトルについては、旧文学部陳列館2階の地理研究室での藤田元春氏の収集になる「黄河之水」との出会いにちなんでいる。ビンの中は砂だけですが、黄河の水をわざわざビンに入れて日本に持ち帰り、研究室に寄贈？した事蹟に、妙に感動した。これは最初の“カルチャーショック”と言ってもよいかも知れないが、まあこれは幼児体験のようなものといってもよいかも知れない。

第一、第二の“カルチャーショック”

最初の“カルチャーショック”は、大学一年の夏に沖縄・八重山群島に行ったことです。動機は単純で、大学では大旅行をしてみたかったから。しかし離島を経験して、あまりにその狭い（地理的にも社会的にも）世界に興味を失った。そして縁あって《大陸を目指す》ことにな

り、三回生になったときにアフリカに行った。

アフリカに行ったら、今度は大陸だから、狭いどころではなくて、まあその広大さのなかで悪戦苦闘することになった。ここで思いがけない“カルチャーショック”に見舞われた。1963年（昭和38）でした。もちろん初めての海外ですから、いわゆるカルチャーショックはいろいろあったが、どうにもならなかったのは、「日本文化見聞談」だった。とにかく出会った人たちは、日本のこととくに日本の伝統文化について質問ぜめにする。禅とは何か、神道とはどういう宗教か、能と歌舞伎はどうちがうのか、等々。

わたしはこれにつまづいた。自分は《日本のことをまるで知らないな》と。これは大きな転機でした。アフリカくんだりまで行って、日本のことを勉強しないかんと思ったのは、まあ皮肉なことです。以後、アフリカを勉強すると同時に日本のこと、日本文化について機会あるごとに勉強するようになった。その意味では、74年に国立民族学博物館が創設された時に採用されて、その後ながく民博で研究生活をおくることができたのは望外の幸せでした。

本日はとくにアカデミックな話の場ではないので、わたしが調査中に撮ったビデオを紹介して、調査研究活動の一端を紹介する。1時間にまとめたビデオの内容は、カメルーン北西部州のマンコンという王制社会の、直訳すると「王のダンス」という意味の[ンガン・フォ]という

一連の行事を撮ったものです。

第三の“カルチャーショック”

アフリカの研究をはじめてから、研究面にかかわるもっとも大きな“カルチャーショック”は、ヨーロッパの学問の基礎にある《アーカイブズ》文化ということです。最近でこそ「デジタル・アーカイブ」などとアーカイブという言葉が頻繁にしかもかなり安易に使われているが、《アーカイブズ》文化の本質に眼をむける必要がある。

わたしが直接ヨーロッパの《アーカイブズ》文化の伝統にふれたのは、いま映像で紹介したカメルーン北西部州の王制社会の資料を求めて、19世紀末から20世紀初頭にこの地方に布教に入ったドイツのミッシェンの本部を訪ねたときです。植民地時代の古い写真や諸資料の断片が見事に整理されている。日本ではそんなものをみたこともなかった。資料整理とはこういうものをいうのかと大きなショックを受けた。

これがあらゆる分野にわたってゆきわたっている。ヨーロッパの文化は、収集と蓄積、分類と分析、このことが徹底している。日本にはなぜかそういういっけん雑多と思える資料を蓄積保存する伝統がない。コレクションは昔からあります。もっとも古いのは正倉院でしょう。そして大きな寺社にはけっこうな資料が残ったようですし、江戸時代になると木村兼葭堂のような立派な博物学者まででている。しかし、諸資料を体系的に蓄積保存する《アーカイブズ》の考え方も、さら

にはそれらを展示する博物館の思想も生まれなかった。

ひとつの事蹟をめぐる、あらゆる資料の収集と保存、分類と分析、それは研究活動の一部であるけれども、これまで必ずしも重視されてこなかった。われわれはどうも研究というとその成果を重んじ、それだけを大事にするが、そのために使ったさまざまな資料類やコピー、調査の記録類、写真等々が十分に残されない。そういうものを残すという思想が欠けてしまっている。

ある事蹟に関する資料は何でも残す、そしてそれを整理、分析し、保存・管理する。《アーカイブズ》の本質はそこなんです。それはきちっと整理、分析（分類）し、保存・管理しないと意味がない。これを実現する秘訣はお金とスペース。したがってアーカイブズというものは、やはり公共的な事業でないとなかなか実現しない。ポイントはここなんです。日本では伝統的に、そういうことはおおきなスペースをもつ金持ちがやればいいことで、庶民は・・・ということになりがちで、コレクションはあくまで私的なものであってつい最近まではなかなか公共性と結びつかなかった。

平成7年の阪神・淡路大震災の時に、震災の直後から避難所での張り紙メッセージや使用具、被災したモノは勿論、そうした諸々の資料を計画的に収集しました。それらはいま「人と防災未来センター」に収蔵しその一部は展示している。そしていまでも収集は続いている。

第四の“カルチャーショック”

4番目の“カルチャーショック”は、まさにその阪神・淡路大震災です。今年（平成23）は3月11日に東日本大震災があった。これは、巨大津波とか福島原発とか地震そのものに加えて二次的被害が大きいのが阪神淡路大震災に比べてきわだった特徴だと思います。

このときの“カルチャーショック”は、《人びとは地域のことをほとんど何も知らずに暮らしている》ということでした。とくに地域の文化・文化財になると、まったく何もご存じない。これは文化財行政の指定制度が裏目に出ている。役所は指定文化財しか文化財として扱わない（扱えない）。指定する時には詳しい調査がありますから、その資料で所在から材質から何でも判る。だから地震が発生すると、先ず一番に現地に飛んで、そのデータにもとづいて被災状況を調べる。結果が出る。地域の文化はそれで終わり。地域の人にとって大切なものがあるだろうが誰も知らない。

わたしたち自身を含めて、いまは地域のことを知らなくても生きていくことができるようになった。もともと人はコミュニティのことを知らなければ生きてはいけなかったのだが、明治以来の社会づくりが、このように地域のことを知らないまま生活している社会をつくってきた。指定文化財だけが文化ではない。人びとが地域の文化を取りもどすにはどうしたらよいのか。こうした機会をへて、とくに地域における博物館の役割がとても重

要であると考えられるようになった。10年前から兵庫県立歴史博物館に勤めています。地域における歴史博物館・資料館の課題は重い。最近は大びかさなる大災害もあって、“地域の記憶装置”という考えを強くしている。

このような経緯もあって、現在、京都大学総合博物館の三階にある「地図・民族資料研究展示室」の整理を手伝っているが、この部屋とのかかわりについては、すでに『京都大学文学部地理学教室百年史』に小文を書いたので、参照していただければ幸いです。

端 信行「陳列館標本資料室から総合博物館地図・民族資料研究展示室へ」京都大学文学部地理学教室編『京都大学文学部地理学教室百年史』、2008年8月1日、ナカニシヤ出版、京都。



講演会

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

研究室便り

＜総合博物館における

地図資料等の利用について＞

地理資料部門の助教は 2008 年度より不在が続いておりますが、当面の代替措置として、地理資料担当の教務補佐員に地図・地理資料の管理にあたってくださいしております。（勤務日：火～金、勤務時間：9:00 - 17:00（除く、昼休み））

総合博物館地理資料部門に収蔵されている地図資料等の閲覧・撮影などを希望される方は、お手数ですが、下記の窓口までご連絡のうえ、所定の手続きをお取りくださいますよう、お願いいたします。

京都大学総合博物館 事務局

電話：０７５－７５３－３２７２

＜外国人研究者～訪問された方～＞

2012 年 4 月 11 日、リチャード・ホーウィット (Richard Howitt) 先生 (Macquarie University 教授, オーストラリア) が教室を再訪されました。先生は 2011 年に文学研究科客員教授として教室に滞在された方です。今回の訪問も、お孫さんを含めてご家族とご一緒に、教室の学生たちとも大変楽しく交流してくださいました。

＜地理学教室への寄贈図書

～2011年度～＞

個々の寄贈者のお名前は掲載しておりませんが、昨年度、地理学教室にご寄贈いただいた図書の一覧です（雑誌・定期刊行物等は除く）。これらの図書は、文学研究科図書館または地理学共同研究室に配置し、学生ならびに教室スタッフの研究・教育に活用させていただいております。厚く御礼申し上げます。

過去にいただいた図書も含めて、これらの寄贈図書は、皆様にもご利用いただけるようにしておりますので、どうぞご活用ください。

（図書）

- ・もう危ない！未来はどうなる？地球の水 SOS 図鑑
その実態から取り組みまで、PHP
- ・地域と人口からみる日本、古今書院
- ・駒澤大学所蔵外邦図目録 2011 (CD-ROM 版付き)
- ・映像で見る奈良まつり
- ・韓国歴史地図
- ・中南米における文化遺産の資源化とツーリスモ
(神戸市外国語大学外国学研究所)
- ・改新世界時局要図 大東亜篇
- ・よくわかる観光社会学
- ・アンテルナショナル・シチュアシオニスト (1)
状況の構築へ
- ・キリコの街(2002)
- ・地図でみる日本の外国人
- ・アジアの都市と水環境(2011)
- ・富山 砺波散村の変貌と地理学者
- ・観光研究レファレンスデータベース 日本編

- ・ 高校生のための島根の地理・歴史・文化・社会がわかる資料集 NAVI 島根 2011
- ・ はじめての地域学-「地域」が映し出す社会と経済
- ・ 「知の加工学」事始め-受容し、加工し、発信する日本の技法
- ・ 京都の歴史 GIS：パイリンガル版（2011）
- ・ 世界地誌シリーズ 4 アメリカ
- ・ こまやかな文明・日本
- ・ 津田弘道の生涯：維新时期・岡山藩の開明志士（2007）
- ・ 集成図「奈良」セット
- ・ 人の移動と 21 世紀，グローバル社会叢書第 IV 卷
- ・ 太平洋の島々に学ぶ ―ミクロネシアの環境・資源・開発
- ・ 古代・中世遺跡と歴史地理学
- ・ 山村政策の展開と山村の変容（2011）
- ・ アジア巨大都市：都市景観と水・地下環境（2011）
- ・ 徳川日本のライフコース：歴史人口学との対話（2006）
- ・ 日系アメリカ人のエスニシティ：強制収容と補償運動による変遷（1994）
- ・ 都市的世界/コミュニティ/エスニシティ：ポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ集成（2003）
- ・ 越境する家族：在日ベトナム系住民の生活世界（2001）
- ・ 中国の人口問題と社会的現実（2005）
- ・ 東日本の家族を中心として（1997）
- ・ 西日本の家族を中心として（1997）
- ・ 日本のむらむら、昔と今：人口からみた九篇（2011）
- ・ グローバル空間の政治経済学：都市・移民・情報化（2004）
- ・ 都市コミュニティとエスニシティ：日系人コミュニティの発展と変容（1997）
- ・ 来日外国人犯罪：文化衝突からみた来日中国人犯罪（2003）
- ・ 地理学と私/浮田典良（1996）
- ・ 香港：移りゆく都市国家（1997）
- ・ 沈みゆく香港（1997）
- ・ 中国十億の人口問題：中国の人口理論（1979）
- ・ 21 世紀の世界システム（1996）
- ・ 新しい世界システム（1999）
- ・ 企業テレワーク入門（1999）
- ・ テレコミュティングが都市を変える：ネットワーク時代の企業とオフィス
- ・ テレワーク世紀：働き方革命：理論と実践（1998）
- ・ マルチメディア時代を拓くテレコミュティングのすすめ
- ・ すぐわかる SPSS によるアンケートの調査・集計・解析（2010）
- ・ すぐわかる SPSS によるアンケートの多変量解析（2007）
- ・ SPSS による多変量データ解析の手順（2005）
- ・ SAS によるデータ解析の基礎：Windows 版 SAS 準拠（1997）
- ・ 近世ソウル都市社会研究：漢城の街と住民（2009）
- ・ 移民・難民・援助の政治学：オーストラリアと国際社会（1991）
- ・ 流れゆく大河：中国農村労働の移動（1999）
- ・ フィリピンー日本国際結婚：移住と多文化共生（2006）
- ・ 「在日企業」の産業経済史：その社会的基盤とダイナミズム（2010）
- ・ 世界システム（1989）
- ・ 日本の企業組織革新的適応のメカニズム：長期取引関係の構造と機能（1997）
- ・ 通貨の地理学：通貨のグローバリゼーションが生む国際関係（2000）
- ・ インド経済の地域分析（1994）
- ・ アジア・太平洋新時代：日・米・アジアの新しい相

互関係(1991)

- ・アジア・太平洋の国際関係と日本(1992)
- ・アジア太平洋のエポック(1998)
- ・世界の労働力移動：ILO リポート(1998)
- ・「都市的なもの」の現在：文化人類学的考察(2004)
- ・在日コリアンの宗教と祭り：民族と宗教の社会学(2002)
- ・グローバル化で変わる国際労働市場：ドイツ、日本、フィリピン外国人労働力の新展開(2006)
- ・現代国家と世界システム(1992)
- ・越境と難民の世紀(2001)
- ・在留特別許可：アジア系外国人とのオーバーステイ国際結婚(2002)
- ・大阪府立狭山池博物館 平成 23 年度特別展「古代狭山池と台地開発のはじまり」
- ・途上国のグローバリゼーション：自立的発展は可能か(2000)
- ・20 世紀の滞日済州島人：その生活過程と意識(1998)
- ・續・太平洋経済圏の生成
- ・エスニック状況の現在(1995)
- ・国際結婚：イスラームの花嫁(2000)
- ・移民と難民の国際政治学(1999)
- ・焼畑の環境学：いま焼畑とは(2011)
- ・東南アジアの大都市圏 ― 拡大する地域統合(2011)
- ・アジア市場を拓く―小売国際化の100年と市場グローバル化(2011)
- ・「企画展示 風景の記録 ―写真資料を考える」国立歴史民俗博物館(2011)
- ・地理学教室 50 年史―その教育と研究―(2011)(首都大学東京大学院都市環境科学研究科地理学教室)
- ・エスニシティの地理学―移民エスニック空間を問う
- ・日本文化デジタル・ヒューマニティーズの現在：バイリンガル版(2009)
- ・JNTO 訪日外客消費動向調査 2005 訪日外国人の消

費動向データ

- ・Our vision 「生存の条件」：地球温暖化：忍び寄る危機への対応(2009)
- ・20 世紀環境史(2010)
- ・地方行財政の地域的文脈
- ・21 世紀の観光とアジア・九州(2001)
- ・国際化時代の女子雇用(1991)
- ・文明の人口史：人類と環境との衝突、一万年史(1989)
- ・小人口世界の人口誌：東南アジアの風土と社会(1998)
- ・現代家族の構造と変容：全国家族調査(NFRJ98)による計量分析(2004)
- ・沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン：新たな出会いとつながりをめざして(2007)
- ・軍港都市史研究 2 景観編(2012)
- ・軍港都市史研究 1 舞鶴編(2012)
- ・在日外国人と帰化制度
- ・大韓國 古世界地圖(1998)
- ・DIERCKE SCHUL-ATLAS für HOHERE LEHRANSTALTEN
- ・THE INTERNATIONAL REFERENCE ATLAS
- ・Geographical issues on maritime names: special reference to the East Sea (2010)
- ・Recent Advances in Remote Sensing and GIS in Sub-Sahara Africa (African Political, Economic, and Security Issues), (2011)
- ・Imploding populations in Japan and Germany: a comparison (2011)
- ・A cultural geography of the Great Plains of India: essays, techniques (1972).
- ・An historical-cultural geography of Japan: New Zealand-Japan cultural exchange lecture (1981)
- ・Geographical field research in Northwestern India: a

- progress monograph* (1974)
- ・ *Human and Natural Environmental Impact for the Mekong River* (2011)
- ・ *Spatial Analysis and Modeling in Geographical Transformation Process*

(雑誌)

- ・ 茨城地理 第 12 号 (2011)
- ・ エネルギー史研究 no.26 (2011)
- ・ えりあぐんま 第 17 号 (2011)
- ・ エリア山口 第 41 号 (2012)
- ・ 大阪府立狭山池博物館研究報告 7 (2011)
- ・ オーストラリア研究紀要 第 37 号
- ・ 外邦図研究ニューズレター No.8 (2011)
- ・ 海洋地質図 no.70-73 (各 CD)
- ・ 観光科学研究 第 4 号 (2011) (首都大学東京都市環境科学研究科)
- ・ 関西学院史学 第 39 号
- ・ 空間・社会・地理思想 第 14 号 (2011)
- ・ 京漁連だより 第 424-430 号
- ・ 研究論叢 LXXVII-LXXVIII (2010-2011)
- ・ 神戸市外国語大学 外国学研究 78
- ・ 国士舘大学地理学報告 no.19-20 (2011-2012)
- ・ 駒澤地理 第 47 号 (2011)
- ・ しま no.224, 226-228 (財団法人日本離島センター)
- ・ 首都大学東京大学院都市環境科学研究科 地理学教室年報 2009 年度・2010 年度
- ・ 人文学部紀要 第 31 号 神戸学院大学人文学部
- ・ 石炭研究資料叢書 no.32
- ・ 総合資料館だより No.167-168, 170 (京都府立総合資料館)
- ・ 測量 第 78-79 号 (日本測量協会関西支部)
- ・ 地域学研究 第 24 号 (駒澤大学応用地理研究所)
- ・ 地域研究 vol.51,no.1, 2 2011-3 (立正地理学会)
- ・ 地域研究年報 2011` 33 (筑波大学人文地理学・地誌学研究会)
- ・ 地域と社会 第 14 号
- ・ 地學雑誌 2011 vol.120, no.2-6, vol.121, no.1 (2011-2012)
- ・ 地質調査研究報告 vol.62 no.1/2, 3/4, 5/6, 7/8, 9/10 (2011)
- ・ 地図情報 vol.31 no.1-4
- ・ 地理 5-12 月号 vol.56, (2011), 1-4 月号 vol.57 (2012)
- ・ 地理学研究 第 39 号 (2011) (駒澤大学大学院地理学研究会)
- ・ 地理学評論 vol.84, no.3-6 (2011), vol.85, no.1-2 (2012)
- ・ 地理学報告 第 112-113 号 (2011) (愛知教育大学地理学会)
- ・ 地理学論集 No.86 (2011) (北海道地理学会)
- ・ 地理研究 19 号 (2012) (法政大学大学院)
- ・ 地理誌叢 第 53 巻 第 1-2 号 (2011) (日本大学地理学会)
- ・ 地理歴史人類学論集 2 号 (2011) (琉球大学法文学部人間科学紀要別冊)
- ・ ちりレポ 第 9 号 (城北学園)
- ・ 東北学院大学論集 歴史と文化 第 47 号
- ・ 東北文化研究所紀要 第 43 号 (2011) (東北学院大学)
- ・ 都市情報学研究 no.16 (2011) (名城大学都市情報学部)
- ・ 砺波散村地域研究所研究紀要 第 28 号 (2011)
- ・ 奈良大地理 第 17 号 (2011)
- ・ 日本海地域の自然と環境 第 17-18 号 (福井大学地域環境研究センター研究紀要)
- ・ 人間科学 第 26 号 (琉球大学法文学部人間科学科紀要)

- ・人間文化 H & S 28-29 (2011) (神戸学院大学 人文学会)
- ・文化史學 第 67 号 (同志社大学・文化史学会)
- ・法政地理 第 43 号
- ・北海学園大学学園論集 148 号 (2011)
- ・待兼山論叢 日本学篇 45 (2010)
- ・山形大学紀要 (社会科学) 第 42 巻, 第 1-2 号
- ・立命館地理学 23 (2011)
- ・歴史人類 第 40 号 (筑波大学)
- ・歴史地理学野外研究 第 15 号, (2012) (筑波大学)
- ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊第 19 号 -1-2
- ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 no.22, (2011)
- ・AFRICAN STUDY MONOGRAPHS vol.32 no.1-4 (2011)
- ・AFRICAN STUDY MONOGRAPHS Supplementary Issue no.42-43 (2011)
- ・COSMICA AREA STUDIES 2011 XLI (京都外国語大学)
- ・CSEAS NEWSLETTER Center for Southeast Asian Studies Kyoto University No.62, 64-65
- ・GEOGRAPHICAL REPORTS OF TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY No.46 (2011)
- ・Journal of Ritsumeikan social sciences and humanities, vol.3 (2011)
- ・Southeast Asian Studies 東南アジア研究 vol.48, no.2-3, 4, vol.48, no.1-4.
- ・Tsukuba geoenvironmental sciences vol.6 (2010) (筑波大学大学院地球環境学専攻)
- ・2010 JAPANESE PROGRESS IN CLIMATOLOGY (法政大学気候学談話会)
- (報告書)
- ・瀬戸内海文化研究・活動支援助成報告書(2007).
- ・総合地球環境学研究所 研究プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」
- ・秋山の自然と人間～その歴史と文化を考える 4～報告集 (総合地球環境学研究所プロジェクト D-02)
- ・研究成果報告書 菊池川流域の景観史研究 (2011)
- ・平成 22 年度研究開発学校 高等学校地理歴史科総合科目「世界の風土と文化」研究報告書
- ・近代都市の創出と再生産 ―小樽市における階層構成を中心に― (2005)
- ・近代都市の創出と再生産 ―小樽市における社会変動と社会移動― 『第 2 報告書』(2006)
- ・近代都市の創出と再生産 『第 3 報告書』(2011)
- ・歴史地理学実習報告 第 10 集, 2011.3
- ・歴史地理学実習報告 第 11 集, 2012.3
- ・2010 年度 地域調査実習報告書 「滋賀」(金沢大学人文学類地理学教室)
- ・関西大学地理学研究室実習報告書(35) 2010 年度
- ・会津地方の地域調査 2010 実習報告書 東北大学理学部地圏環境科学地理学教室
- ・少子化の要因としての成人期移行の変化に関する人口学的研究, 第 2 報告書, 第 3 報告書. (国立社会保障・人口問題研究所)
- ・2005 (平成 17) 年度～ 2007 (平成 19) 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書 港湾をともしなう守護所・戦国期城下町の総合的研究―北陸を中心に― (2008) (代表: 仁木宏)
- ・平成 22-25 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 課題番号 22320170) による研究成果報告 (その一) 研究課題「文化遺産としての幕末蝦夷地陣屋・困郭の景観復原-GIS・三次元画像ソフトの活用」十和田市立新渡戸記念館所蔵 新渡戸十次郎筆『松前持場見分帳』の翻刻[解説者 村上由佳] (代表: 戸祭由美夫) (2012)
- ・東京大学史料編纂所研究成果報告 2011-2「地図史料

学の構築」の新展開 科学研究費補助金基盤研究(A)
『地図史科学の構築』の新展開-科学的調査・復元
研究・データベース」課題番号 2142018(代表:杉
本史子)

- ・CD-ROM「東京大学史料編纂所蔵 近世・近代印
刷図DB【試用版】(請求番号 1047.10 ~ 99)作成:
科学研究補助金基盤研究(A)「地図史科学の構
築」の新展開-科学的調査・復元研究・データベ
ース
- ・文部省科学研究費報告書 中山間地域における都市
農村交流を媒介とした地域再生方策—茨城県大子町
黒沢地区を対象に— 2012 年 3 月茨城大学人文学部
都市農村交流研究会

＜研究室の動静＞

教室の事務は、引き続き三上純子さん
にお願いしております。

本年度は、大学院博士後期課程2名、
修士課程6名、学部4回生18名、3回
生6名、聴講生2名、研修生1名が在学
中です。

＜3回生、新修士1回生、研修員の

自己紹介＞

本年度は、新たな顔ぶれとして、3回
生6名、修士課程1回生1名、研修生1
名を迎えました。皆さんに簡単に自己紹
介していただきます。

(3回生)

石見 暉

今年から地理学を専修します、石見 暉で

す。石見と書いて「いわみ」と読みます。
最近石見銀山が世界文化遺産に登録さ
れたためか、「いしみ」と呼ばれることが
少なくなり、嬉しいです(笑)。分からな
いことばかりだとは思いますが、よろし
くお願いします。

片山さゆみ

こんにちは！3回生の片山さゆみです。
私は考えるより行動する派なので地理学
を選びました(笑)今は京都と中国の都市
地理に興味を持っています。好きなこと
は、お散歩とカフェめぐりです。これか
らよろしくお願いします。

熊野貴文

文学部3回の熊野です。旅行などいろん
な土地へ出かけることが好きで、地理学
にも興味を持つようになりました。出身
地は千葉県市原市で、Jリーグが好きで
す。あと、よく冬のオホーツクに行きま
す。よろしくお願いします。

梶田 剛

地理学専修新3回生の梶田剛です。1・
2回生時の怠慢から、卒業単位が一般教
養・専門ともに圧倒的に不足していて、
ハードな1年になりそうな予感しかして
いません。ですが、地理学という学問の
楽しさに触れていき充実した研究を行っ
ていきたいです。

久木智裕

地理学専修に分属した久木智裕です。出

身地は滋賀県で、今は大阪府に住んでいます。中学校や高校で地理は得意科目だったので、地理学専修にすることを決めました。今は GIS を使えるようになりたいと思っています。よろしくお願いします。

古田祥未

文学部三回生の古田と申します。地理学には高校の先生の影響で興味を持つようになりました。研究したいことはまだ具体的には決めてませんが、観光業に興味があり、これからいろいろ調べていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

(修士課程 1 回生)

佐々木夏妃

京都府立大学文学部歴史学科を卒業しました、佐々木です。大学では地理学が専門ではなかったのですが、幅広く学びながら自分の課題を追究していきたいと思っています。小学生からバドミントンをやっていたので、実は体育会系です。よろしくお願いします。

(研修員)

山内熱人

人間・環境学研究科から小林先生の下へ研究員として参りました、山内熱人と申します。メキシコの農村をフィールドとして博士論文の執筆を目指しています。人類学という隣接分野からの移籍となりますが、皆様よろしくおねがいします。

〈2011年度の実習旅行〉

2011 年度は、10 月 24 ～ 27 日まで、長野県諏訪市において、2 回生・3 回生の計 14 名が調査を行い、報告書を作成しました。

〈学部卒業生・院生の進路〉

* 学部卒業生

高橋 俊裕	
芦田 真隆	文学研究科（修士課程）
江崎 洋平	香川県庁
神戸 陽菜子	文学部（聴講生）
熊田 健太郎	西日本旅客鉄道（株）
錠解 慈	DeNA
出口 貴大	大和郡山市役所
畠山 美樹子	三井住友銀行
前 未来	富山県庁

* 修士課程

朝倉 慎人	文学研究科（博士後期課程）
嘉村 俊也	佐賀県立鳥栖高等学校
趙 政原	東京大学総合文化研究科（博士課程）
永見 佳央里	糸魚川東中学校

* 博士後期課程

沖 慶子

* 科目等履修生

松本 貴裕	洛星中・高等学校
-------	----------

〈院生の研究状況の報告〉

今年度までの院生の研究状況を報告します。以下は、閲読を経た論文のリストです。

D3 網島 聖

- ・明治後期地方都市における商工名鑑の「繁昌記」の出版—山内實太郎編『松本繁昌記』を事例に一, 史林, 93-6, 119-144 頁 (2010)
- ・近代における同業者町の存続とその意義—明治・大正期の大阪道修町と医薬品産業を事例として—, 人文地理, 64-2, 印刷中 (2012)

<2012年度講義題目>

講義(系共通科目)

小林致広・石川義孝 人文地理学概説

特殊講義

教授 小林致広 生物・文化資源利用の地理学

教授 石川義孝 現代日本における外国人定住化の検討

教授 田中和子 空間行動のシミュレーションに関する諸問題

准教授 米家泰作 地理的「知」の歴史地理学

人環教授 小島泰雄 中国における生活空間の展開

地球環境学堂教授 小方 登 地理情報・衛星画像の処理・分析の基礎

理学部准教授 堤 浩之 地形学

講師 若林芳樹 人間・社会との関わりでみた地理情報科学の諸問題

講師 大住克博 人との相互関係から理解する森林景観

講師 今里悟之 農村地理学の基礎

講師 吉田容子 人文地理学におけるジェンダー研究

講師 池谷和信 アフリカ地域と地球

講師 杉浦真一郎 現代日本における高齢者福祉サービスの需給空間と介護保険行財政

演習Ⅰ—地理学研究法—

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

演習Ⅱ—4回生演習—

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

講読

教授 小林・石川 英語地理書講読

教授 田中和子 ドイツ地理書講読

文学研究科教授 小山 哲 フランス

地理書講読

人文研助教 小野寺 史郎 中国地理書

講読

地理学実習

田中和子・米家泰作

大学院演習—地域の諸問題—

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

事務局から

<地理学談話会2011年度会計報告>

(2011年4月1日～2012年3月31日)

【資金会計】

<収入>

年会費	170,000
寄附金	0
利子	68
前年度繰越金	535,200

計 705,268

<支出>	
運営への振替	323,706
郵便振替手数料	7,520
次年度への繰越	374,042

計	705,268
---	---------

【運営会計】

<収入>	
資金会計からの振替	323,706
秋期懇親会会費	53,000
春期懇親会会費	109,500

計	486,206
---	---------

<支出>	
秋季懇親会	48,351
講師3名交通費	71,000
OB交流会経費	4,480
春期論文発表会経費	109,500
会報・名簿等印刷費	161,200
通信・文具等費	91,675
弔電・供花等	0

計	486,206
---	---------

<計報>

前回の会報以降、次の方々がお亡くなりになりました（お亡くなりになったとのお知らせをいただいた方を含みます）。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（確認分、括弧内は卒業年、敬称略）

阿部	正道	（1941年卒）
後藤	正尚	（1966年卒）
河畑	文朗	（1941年卒）
田中	（安藤）秀四郎	（1946年9月卒）

<住所不明者についてお願い>

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は、談話会事務局までご一報ください。（数字は卒業年、敬称略）

安福	伸光	（1997年卒）
池内	麟太郎	（1973年卒）
石角	強	（1970年卒）
石橋	弘嗣	（2006年卒）
石原	大嗣	（1997年卒）
石原	（林）美歩	（1995年卒）
石村	裕輔	（1992年卒）
今井	平八	（1944年卒）
岩部	敏夫	（1991年卒）
上田	直人	（2009年卒）
江崎	健治	（1992年卒）
遠藤	元	（1996年卒）
遠藤	正雄	（1978年卒）
太田	隆文	（1997年卒）
大野	宏	（1992年卒）
大山	晃司	（1995年卒）
岡本	靖一	（1967年卒）
岡本	美津子	（1987年卒）
興津	俊之	（1991年卒）
小口	稔	（1991年卒）
小野寺	伴彦	（2000年卒）
楓	雅之（泰昌）	（1945年卒）
片寄弘也		（2004年卒）

勝村 (赤座) 眞知子	(1973 年卒)
叶谷 房子	(1998 年卒)
川合 大地	(1998 年卒)
川添 和明	(1995 年卒)
貴志 謙介	(1981 年卒)
木地 節郎	(1949 年卒)
北口 卓美	(1990 年卒)
児玉 高太朗	(1990 年卒)
西井 (小林) 理子	(2002 年卒)
坂部 誠治	(1991 年卒)
酒匂 幸樹	(2000 年卒)
島崎 郁司	(1996 年卒)
嶋野 浩一朗	(1997 年卒)
清水 究吾	(1998 年卒)
新谷 泰久	(1990 年卒)
鈴木 伸国	(1988 年卒)
田島 渡	(1948 年卒)
都子 屋	(1940 年卒)
中村 尚弘	(2000 年卒)
中山 耕至	(1993 年卒)
那須 久代	(1988 年卒)
檜崎 (藤川) こず恵	(1998 年卒)
南部 一寿	(1999 年卒)
西尾 正隆	(1970 年卒)
西沢 仁晴	(1974 年卒)
西山 隆彦	(1995 年卒)
能勢 (朝倉) 正寛	(1962 年卒)
福田 新一	(1971 年卒)
古川 昇平	(2006 年卒)
前田 奈実	(1999 年卒)
松本 弘史	(1983 年卒)
御手洗 央治	(1993 年卒)
宮澤 博久	(2005 年卒)
山口 一郎	(1980 年卒)

山下 良	(1989 年卒)
山田 (児玉) 憲子	(1970 年卒)
山中 一高	(1991 年卒)
吉野 修司	(1995 年卒)
吉村 健志	(2002 年卒)
六嶋 美也子	(1993 年卒)
渡邊 克己	(2004 年卒)

＜オープンキャンパス：2010年度の 報告と2011年度のお知らせ＞

2011 年 8 月に京都大学のオープンキャンパスが開催されました。文学部の見学・説明会もこの一環として、11 日に行われました。文学部の全体説明のあと、各自が希望する専修の研究室を訪問してもらいました。

2012 年度の京都大学主催の全学オープンキャンパスについては、
<http://www.kyoto-u.ac.jp/> をご覧下さい。
文学部の見学・説明会は、8 月 9 日 (木) の予定です。

地理学教室では、大学院の受験志望者や、中学高校の教員の方々、また、一般の市民の方にも参加して頂けるような見学会を 10 月 27 日 (土) に開催する予定です。詳細な日程や参加申込の案内は、地理学教室のホームページ、
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/geo-top_page/
に掲載する予定ですので、ご覧下さい。

<2012年度秋季地理学談話

のお知らせ>

本年は、下記のようなプログラムを予定しております。ぜひお越しください。

記

日 時：10月27日(土)

午後1時—5時

場 所：文学部新館1階

第1・2講義室

◎教室見学会：午後1時より

◎OB交流会：午後2時より

講師 久保 智祥氏(2003年卒)

ほか

◎講演会：午後3時半より

戸祭 由美夫 氏(1969年卒)

◎懇親会：午後5時より

(文学部新館 第1講義室)

<地理学教室所蔵の

写真資料について>

地理学共同研究室や総合博物館地理作業室のロッカーの中に保管されていた地理学教室関係者の古い写真が数百枚あります。

卒業生の方々に見ていただき、写真に関する情報のご提供や、整理方法のご指示などをいただければと願っております。

どうぞ、お気軽に教室をお訪ねいただき、アルバムをご覧くださいませよう、お願い申し上げます。

☆一年あたり千円を目処として、それぞれの会員の方々に、談話会の運営経費へのご協力をお願いしております。随時、ご支援をお願いいたします。納入の際は、同封しております「郵便振替用紙」をご利用下さい。

京都大学文学部地理学談話会 会報 第23号

発行日 2012年5月15日

発行者 地理学談話会

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 地理学教室内

TEL: 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

URL http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/geo-top_page/